



アメリカ童話から

15

松原至大

わがままな雪だるま

それは、ほんとうに見事な雪だるまでしたよ。なんの不平もなさうでしたが、そうではなかつたのです。まつ黒な石炭の目は、きれいに輝いていました。頭には、帽子がちよこなんとのつていたし、こうしじまのスカラフは、しづかに風にひるがえつていました。なによりもよいことは、ほうきの柄で、できた両腕の先に、栗鼠や小鳥にあげる御馳走のお皿がのつていてました。

それなのに、この雪だるまは、ため息をついて、不平を言うのでした。

「夜も昼もここに立つていて、ぼくはあきちゃつた。君のように飛んで歩きたくな。」

雪だるまの右腕にとまりていた四十からがこれを聞いて。

「あや、雪だるまさんが飛んで歩くなんて、聞いたこともない。あなたは立派な雪だるまじやありませんか?」
と言いました。

「君がそう言うのは、無理もないな。雪のない南の国に行くことも知らないような馬鹿な鳥君たちのために、君は一日じゅう、こうやつて食べものを持つて、立ちんぼうをしていくなくてもいいんだからな。」

「雪だるまが答えると、四十からは

「あなたとのまらないことを言ひあつて、大事な一日を、むだにはできませんよ。」

と言つて、どこかへ飛んで行きました。

間もなく一匹の栗鼠が、雪だるまの肩にのぼつて、左腕のところに来ました。そして忙しそうにピーナツツを突

つき始めました。

「ピーナツツを、ほんとうに御馳走さま。おかげで、またほくのお倉がいつぱいになりましたよ。」

栗鼠は、ピーナツツをかみながら言いました。

すると雪だるまはいやな顔をして

「ほくじ、おれなんか言わなくともいいよ。ほくは思うようになるんだつたら、こんなところに立つてやしない。
もつと変つたことをするよ。」

と言つたのでした。

「ほくは、あなたがしてくるように、小鳥や子供たちを楽しくしてあげたら、氣持ちがよいだらうと思ふます。」

「なるほど。それはちがう、ほくは、自分でなにか面白いことがしたいんだよ。」

栗鼠は雪だるまの言うことが、自分の考えていたことどちらがうので、

「議論はやめましよう。とにかく、ピーナツツをありがとう。」

と云つて、自分のお倉の方へはねて行きました。

しばらくの間、雪だるまはひとりぼつかつでした。そこへ、一匹の兎があらわれました。そしてこわごわ雪だるまに言つたのでした。

「にんじんとりんごを、そりに入れて、どうもありがとうございます。」

「そりだつて？」

雪だるまは、目をまるくして言いました。「ほく、そりなんか持つてやしないよ。ああ、それでこの気持ちの悪い綱が、ほくの首のまわりにかかつてたのか？ いや、とにかく、君は、ほくにお礼なんか言うことないよ。ほくが知つていたら、にんじんなんか持つて来やしないよ。」

「ああ、そうですか。どうもお邪魔をいたしました。」

「早く行つておくれ。」

雪だるまは、まだぽんぽんしています。兎はもうなにも言わないと、行つてしましました。

暗くなりました。北風が、はだかの木のいたさきを吹きはじめました。

「ふるふるふる。ああ、冷めたい。一日おゆう、氷柱のように冷えてくるのは、やりきれない。」

「雪だるまが言いました。」

「今晚は。」

と、元気な声がきこえました。「あなたは、わたしが会つた初めての雪だるまさんですよ。あなたは冬の名前、霜一族の誉れですよ。」

雪だるまの前に、霜の ジャック・フロストが立つてゐるのでした。

「ほくは、だれの誉れにもなりたくはないよ。なにか、面白くことがほしくや。」

雪だるまは、相かわらず不しきんに言いました。

「あなたは、とてもすばらしい時を送つてくるように、わたしには思えますよ。ビリーさんやベティーさんたち

と遊んだし、鳥や、栗鼠や、兎たちに、御馳走をあげたし。そのほかに、なにがしたいと言つのですか？」

ジャック・フロストは、こう聞きました。

「ぼくは、ほかのもののようにしたがのだよ。小鳥は飛べる。栗鼠と兎は、はねまわれる。ビローさんとベティーさんは、走つたり、遊んだりする。だが、なにより暖たまりたがね。子供たちは、いつも雪の中で遊んでは、暖たまるからね。こう寒くては、ぼくだつて、それがどんなものが知りたいね。」

「それは、無理ですよ。」

と言つて、ジャック・フロストは笑ひ出しました。

「だれにだつて、していけないひとこと、よろこととがありますよ。雪だるまさんは、暖たまるこじはできませんよ。」

「それはそうちが、ぼく、やつてみたがよ。」

と、雪だるまは強情をはるのです。

「そうですか。では、わたし、あしたちよりと北の方へ行く用がありますから、わたしの留守の間、太陽さんにあなたを暖ためていただきましよう。」

こう言つて、ジャック・フロストは、雪だるまの返事も待たないで、行つてしまひました。

雪だるまは、早く朝になればよいと思つました。だが、その朝も、いつものように太陽は青く、凍つてしまつた。道を通る人の足の下では、雪がざくわくと音をたてつていました。

雪だるまは、がつかりしました。

「ジャック・フロストの奴、ぼくをからかつたのだ。」

と、にがい顔をしました。

けれどもその時、南の方からやわらかな風が吹いてきました。太陽の顔がはつきりしてきて。輝きました。その光線が、雪だるまに、じかにあたりました。

「これはいい。うれしいなあ。」

雪だるまは思わずひとりごとを言いました。

南風は、強さを増しました。太陽も、一躍輝きました。雪だるまは、なりとりとして、やわらかくなつてきました。

「やい、ジャック・フロストの奴、ききすきる。暖かすぎるぜ。こうなるとは思わなかつた。太陽さん、どうぞやめて下さーーーあんまり暑くなるのは、やめて下さーーー。」

しかし太陽は、雪だるまには、少しも気がつかないのです。顔いつぱいを輝かして、照りつづけるのでした。雪だるまは、とおり、とおりしてきました。一本の腕が、だらりとしてしまいました。

「ああ、小鳥の食べものが落ちてしまつた。かわいそうに、あの四十からは、今夜、お腹がすくだろう。」続いて、もう一本の腕も、だらりと下にたれてしまひました。ピーナツが、雪の中に落ちました。

「ああ、ああ、あの栗鼠は、どうするだらう？　ほくの身体がとけてしまわなつ中に、ジャック・フロストが帰つてくればいいな。」

雪だるまがこう言つたのを聞いて。

「ねたしがお連れしましょか。」

と言つたのは、北風でした。そして木の枝をめすりて、吹き出しました。

その音を聞くと、南風はどこかへ逃げてしましました。やがて雪だるまのとけるのがとまりました。が、太陽がベッドにはいつてジャック・フロストが裏庭にあらわれた時は、見るもあわれな姿となっていました。

「ひかがでしたか暖たまつて。」

と、ジャック・フロストが聞きまことに、雪だるまは、しょんぼりと答えました。

「いや、どうも。もう御めんですよ。それよりも、小鳥と栗鼠の食べもの台が、どうなつたか、見て下さい。きっとお腹をすかしてしますよ。」

「御心配はいりません。今晚、見事な雪を降らせますから。朝になつたら、ヒリーさんとペティーさんが、また新しくあなたを作りなおしてくれますよ。」

ジャック・フロストが元氣に言うと。雪だるまも今度は元氣な声で。

「やあ、ありがとうございます。もう、一度とほくは不平を言いませんよ。」

(グレイス・T・ペーネット女史の作による)